

セントラルケンタッキー日本人補習校 令和6年(2024)2月24日

# CKJSだより

第80号

校長 松平 昭二

shoji\_matsudaira@hotmail.co.jp

## がまんクラブ

かつて、福島県の校長先生たちが「がまんクラブ」というものをつくったと聞きました。我慢する事柄は一人一人異なってもよく、とにかく何でもよいから我慢すること(もの)を決め、それぞれ話し合い、互いに我慢し合うというものです。つまり、現代人に欠けている忍耐力の訓練だというわけです。



「文明が進歩すれば耐性が低下する」といったのは、動物学者のコンラド・ローレンツですが、大人になってからでは禁煙すら無理なのですから、子どもの頃から忍耐力を鍛えようというわけです。

随分前になりますが、長崎の小6 女児死亡事件(小学校が現場となった殺人事件)がありました。その時思い出したのは、この「がまんクラブ」のことでした。事件は、チャットでの汚い日本語に我慢できなかったのが原因の一つというのですから、もし、忍耐力が子どもにもう少しあれば、事件に至らなかったのではと思ったからです。

「うざい」等の不適切な言葉を使っていたと言いますが、大人の世界も「ヤバイ」「イケメン」等々変な日本語がテレビで氾濫している以上、子どもだけを責めるわけにはいきません。教育の原形は模倣にあることを思うと、本当の教育とは大人が美しい日本語を使い、模範を示すことなのです。テレビ局には、汚い日本語を使わないという「がまんクラブ」でもつくってもらいたいものです。

ところで、長崎の事件の後、これをまねたような小学生による切り付け事件が他にも起きました。こうした少年事件の多発で繰り返されるのは、「心の教育」の大切さの強調です。しかし、それは、命を大切にとか、思いやりの心を、といったような「アクセル型」の方法です。しかしこれらは、他人の命を絶つなとか、他人の心を傷つけるな、といった「ブレーキ型」の方法と表裏になって行われるべきでしょう。

「がまんクラブ」は、ブレーキ型の心の教育方法の一つといえます。「赤信号みんなで渡れば怖くない」ではなく、「赤信号みんなで止まれば我慢できる」から始めたものです。